

メソスケール地域の地誌的資料としての 近世村絵図の利用

岩 崎 公 弥

- I. は じ め に
- II. メソスケール地域の地誌的資料としての近世村絵図の条件
- III. 村絵図を中心とした名古屋城下町周辺地域の地誌的描写
 - (1) 山林荒廃と砂入地の多い東部丘陵地域
 - (2) 島畑の卓越する西部低地地域
 - (3) 都市化する城下町隣接地域
- IV. 自然環境と土地利用の側面から見た地域的特色
 - (1) 砂入地の発生に関わる尾張東部丘陵地帯の山林植生と山林利用
 - (2) 低湿地域における土地利用形態
- V. お わ り に

I. は じ め に

村絵図は歴史地理学研究において、景観復原を行う際のおそらく最も基本的な資料として位置づけられるのではなかろうか。もっとも、景観復原を行う際にどのような点に視点を置くかによって、その利用の仕方は当然異なってくる。実際多くの歴史地理学研究において、多様な形態の村絵図の利用がなされてきた。多様な村絵図の利用が可能なのは、それだけ村絵図には数多くの景観復原に関わる情報が内包されているからに他ならない。

近世の村絵図は、一般に検地の際に作成されたとされるが、今日残存する江戸初期の村絵図は極めて少ない¹⁾。慶長期前後の検地帳類は比較的好く残っているので、その頃の絵図があれば、耕地所有状況を空間的にとらえる研究がもっと

多くなされうるのであろう。さて本来、村絵図とは、まさにその名の通り特定の村についての1村限りの絵図であるので、そこから得られる情報は基本的にはその村に関するものに限られることになる。近世前期において多くの検地帳が作成されたときに絵図も作成されたとなると、ほぼ同時期の絵図が一定の地域内にある程度まとまって存在したことになるのであるが、実際には先述のように近世初期の村絵図の残存例は少ない。したがって村絵図を基として、近世初期のほぼ同一時期の一定の広がりを持つ地域について景観復原を行おうとするときには、かなりの困難が発生する。また、近世中・後期についてみた場合、村絵図の残存度は高くなるものの、検地の実施は村毎に異なっている場合が多く、したがって村絵図の作成年代も異なってくるため、また別の点においてある一定の広がりを持つ地域についての景観復原が難しくなってくる。

幸いなことに近年、市町村史誌の編纂において近世村絵図の資料的価値の重要性が認識され、かなりの市町村において積極的に資料編の一部を村絵図編に当てている場合が多い。但しなかには通常サイズの写真版として掲載されるなど、実際の利用には耐え難いものもある。利用者の便宜を考慮すれば、少なくとも絵図内の文字が判読できる程度の縮尺での収録が望ましい。

さて本稿においては、このようなある一定の広がりを持つ地域（ここでは、メソスケール地域と呼ぶことにする）について、村絵図を基とした景観復原を試みる。一般的に言えば、このような課題に対して前述のような問題が存在す

る。しかし特定の地域については、ある程度このような試みが可能なところがある。そのような例として、本稿では尾張藩に残る天保12(1841)年前後の村絵図を取り上げ、特に今日の名古屋市域に当たる地域について、その地誌的状况を復原してみた。その際、特に今年度の歴史地理学会のシンポジウム課題である「環境」の面に重点を置きながら、メソスケール地域の地誌的状况を村絵図を基本資料としながら描いてみたい。

II. メソスケール地域の地誌的資料としての 近世村絵図の条件

メソスケール地域といった場合、具体的にどの範囲を指すかは研究者によって異なってくるところであるが、本稿においては、ほぼ1~2郡程度の広がり进行想定している。したがって近世の村数から言えば100~200カ村といった程度の範囲にまたがる地域である。

近世の村絵図をメソスケール地域の地誌的資料として使用する場合、第一に、当該地域を網羅する村々について村絵図が残存することが必要である。地誌的研究においてより精度の高い描写を行う場合、地誌的空白地域を少しでも少なくするためにも、なるべく多くの村々の絵図が残存することが求められよう。村絵図の場合、正確な縮尺や村の正しい形状を期待することはできないので、地形図のように絵図同士をつなぎ合わせていくことはできない。また、村の周辺部の記載は一般に粗略になっており、絵図の上で空間的連続性を考察することはかなり面倒である。その点でも、連続した村々の絵図があれば、両村の絵図の村境部分を比較対照しながら、村周辺部についての地誌的情報の精度を高めることが可能である。

第二に、作成された絵図の年代がなるべく近いことが求められる。歴史地理学においては、一般に資料の性格上、厳密な意味での特定時間における景観復原は困難であるが、「時間的に厚みある空間」を研究対象とする歴史地理学であっても、景観復原の場合には、ある程度その厚み

を薄くする必要がある。江戸時代においても、干拓新田開発が盛んな沿岸部や流路が固定されていなかった河川下流部においては、時代による地域の変化は大きい。

第三に、絵図の作成目的が同じであることが望ましい。村絵図作成の契機は、先述した検地のほかにも、領地替・境界紛争・請願にともなうものなど多くがあり、多様である²⁾。絵図の作成目的が異なると、当然そこに描かれる記載内容もその目的に合致させたものとなり、絵図相互の比較や統一的な解釈をする場合にも支障となってくる。

第四に、絵図の書式にある程度の統一性があることが望ましい。これは第三点とも密接に関わるものであるが、しかしかりに絵図の作成目的が同じであったとしても、絵師によって表現方法にかなりの差が生じることも現実には否めない。専門の絵師の場合にはある程度その記載様式は統一されたものとなることが考えられるが、そのことは記載内容の正確さに必ずしもつながるものではない。時には絵図記載は素人である村人が描いた地図の方が、村のありさまを克明に表現していることも考えられる。また、その村絵図を通して村人の空間認識すら考察できる場合もあろう。したがって村絵図の様式の統一は、逆に、個々の村々の現実の生の姿をいきいきとは描き出していない場合があるという点に注意が必要である。

以上の四つの条件のうち、特に第一と第二の条件は、メソスケール地域の地誌的状况を描こうとする場合には欠くべからざる条件といえよう。

さて本稿において取り上げる村絵図は、徳川黎明会の編による『尾張国町村絵図——名古屋市域編——』³⁾に所収された約200カ村の村絵図である。本書に収録された村絵図は、193カ村の他に名古屋城下の絵図1である。同書の解説によれば、今日の名古屋市域には天保15(1844)年成立の『尾張志』付図に照らし合わせると、202の村が存在し、さらにそれに記載のない新田などを加えて205の村が存在したことになっている

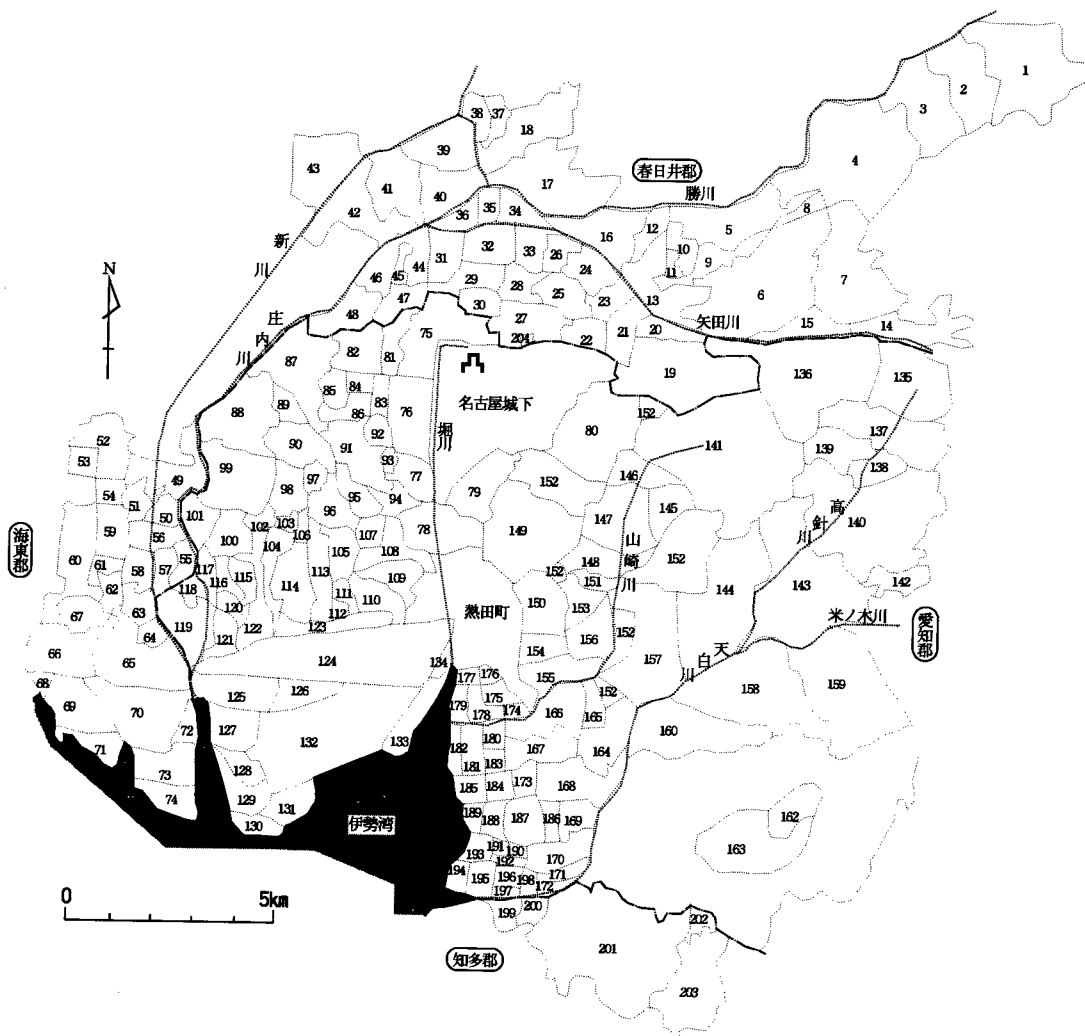


図1 名古屋域における近世村一覧
 村の境界線については一部、梶川勇作(1984)を参照した。

ので、10数カ村が名古屋市域の分としては未収載となっている⁴⁾。図1および表1は、関係地域の村一覧である。絵図のすべては財団法人徳川黎明会徳川林政史研究所に収蔵されているものの複製である。

本書に収録された村絵図の作成年代は、一部作成年不明のものも含むが、天保12(1841)年を中心(109カ村)としつつ、天保13, 15年, 弘化2~4(1845~47)年の他、寛政4~6(1792~94)年, 安政7(1860)年などとなっている。したがって本稿の目的であるメソスケール地域の資

料としての第一と第二の条件をほぼ満たしている。

約半分以上の絵図が天保12年の作成である理由は、天保12年4月に尾張藩の御側御用人の指示に基づき勘定奉行を通じて代官に伝えられ、さらに代官によって各村々に触書⁵⁾が出されたことによる。この触書の中では、絵図の作成に当たって、字の区分、蔵入地と給地の区分、給人名とその地所、蔵入本田と新田の別、村境、寺社、河川、用水、悪水などを彩色して示すことなどを要求している。尾張藩がどのような目的

表1 名古屋市内における近世村一覧

村 名	村 名	村 名	村 名	村 名
1.上志段味	43.平田	85.大秋	127.甚兵衛後新田	169.本地
2.中志段味	44.名塚	86.中島	128.神宮寺新田	170.南野
3.下志段味	45.新福寺	87.日比津	129.宝来新田	171.牛毛
4.吉根	46.堀越	88.稲葉地	130.永徳新田	172.荒井
5.川	47.児玉	89.上中	131.稲富新田	173.又兵衛新田
6.小幡	48.枇杷島	90.下中	132.熱田前新田	174.巾着新田
7.大森	49.万場	91.米野	133.作良新田	175.熱田伝馬新田
8.牛牧	50.長須賀	92.牧野	134.船方新田	176.熱田仁右衛門新田
9.大森垣外	51.松下	93.平野	135.藤森	177.図書新田
10.大永寺	52.千音寺	94.露橋	136.猪子石	178.長三郎新田
11.金屋坊	53.新家	95.北一色	137.上社	179.紀左衛門新田
12.幸心	54.服部	96.長良	138.下社	180.戸部下新田
13.守山	55.前田	97.高須賀	139.一色	181.道德新田
14.森孝新田	56.伏屋	98.烏森	140.高針	182.道德前新田
15.猪子石原	57.助光	99.岩塚	141.末森	183.忠治新田
16.瀬古	58.榎津	100.野田	142.梅森	184.又兵衛新新田
17.味鏡	59.春田	101.横井	143.植田	185.当栄新田
18.如意	60.戸田	102.八田	144.八事	186.弥次右衛門新田
19.鍋屋上野	61.供米田	103.万町	145.伊勝	187.水袋新田
20.大幸	62.包里	104.高畑	146.丸山	188.宝生新田
21.矢田	63.納屋山新田	105.四女子	147.川名	189.宝生前新田
22.大曾根	64.江松	106.本郷	148.石仏	190.八左衛門新田
23.山田	65.東福田新田	107.二女子	149.御器所	191.繰出新田
24.上飯田	66.西福田新田	108.五女子	150.高田	192.丹後江新田
25.下飯田	67.富永	109.牛立	151.本願寺外新田	193.俊広新田
26.辻	68.福田前新田	110.中野	152.名古屋新田	194.甚徳新田
27.杉	69.茶屋後新田	111.丸米野	153.本願寺	195.北柴田新田
28.東志賀	70.茶屋新田	112.八ツ屋	154.大喜	196.源兵衛新田
29.西志賀	71.小川新田	113.小塚	155.本井戸田	197.柴田屋新田
30.田幡	72.七島新田	114.荒子	156.北井戸田	198.鳴海伝馬新田
31.稻生	73.藤高新田	115.中郷	157.中根	199.名和前新田
32.光音寺	74.藤高前新田	116.打出	158.島田	200.込高新田
33.安井	75.名古屋	117.中須	159.平針	201.大高
34.成願寺	76.広井	118.大蟠螂	160.野並	202.有松
35.中切	77.日置	119.下之一色	161.鳴海	203.桶狭間
36.福德	78.古渡	120.法華	162.平手新田	204.太賀藤新田
37.大蒲新田	79.前津小林	121.東起	163.相原	
38.喜惣治新田	80.古井	122.中島新田	164.桜	
39.比良	81.押切	123.中野外新田	165.新屋敷	
40.大野木	82.栄	124.熱田新田	166.山崎	
41.上小田井	83.高畑	125.当知新田	167.戸部	
42.中小田井	84.中野	126.土古山新田	168.笠寺	

村番号は図1に対応

でこの年に領内の村々にこのような触書を出したのかについては十分解明されていないが、天保末から弘化期に作成された尾張藩の藩撰地誌である『尾張志』編纂の基礎資料とするためであった可能性もある⁶⁾。いずれにしろ作成目的がほぼ同じものであること、絵図作成に際しての様式の統一などに関しても第三、第四の条件を満たしている。

III. 村絵図を中心とした名古屋城下町 周辺地域の地誌的描写

(1) 山林荒廃と砂入地の多い東部丘陵地域

まず東部丘陵地の村落についてみることにする。図2に示した春日井郡上志段味村の絵図(天保15年作成)の分析から始めたい。

上志段味村は、現守山区の最も北にある村で、全村が一円蔵入地となっており、村高は577石(田30町、畑6町)の村で、戸数は140戸ほどであった(『徇行記』⁷⁾148戸、絵図135戸)。村の耕地の

ほとんどは絵図からも分かるように水田であった。これらの水田は村内各所にみられる雨池、特に大久手池によって灌漑されていた。村西部の中志段味村との境をなす野添川は『徇行記』に「玉野川(庄内川)へ落ちる砂おびただしく押出せり」と記されているように、絵図でも「砂入」「年砂引」の文字がみられる。

かつては御林の伐採が1年毎に行われていたので村民の山稼ぎがあったが近年はなくなると『徇行記』にある。村絵図中の東部・南部にみられる禿山化した御林は、近世前期における周辺の森林の過度の伐採の様子を伺わせている。

もう一つ注目されるのは鹿垣の存在である。17世紀に記された『寛文覚書』⁸⁾にも「鹿垣土居960間(=1730m)」があるというように、絵図にもそれがみられる。鹿垣の存在は本村の東の下水野村(瀬戸市)、中水野村さらに本村西の中志段味、下志段味などにもあったようで、村々では猪や鹿の害に悩まされていたのであろう。

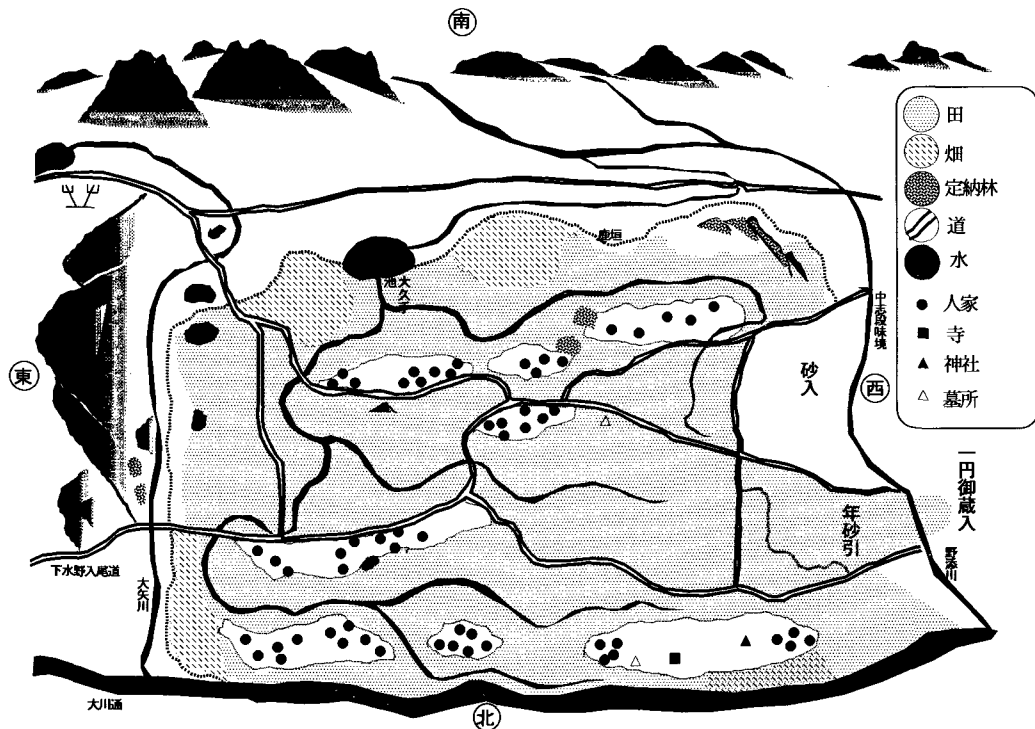


図2 天保15(1844)年尾張国春日井郡上志段味村絵図

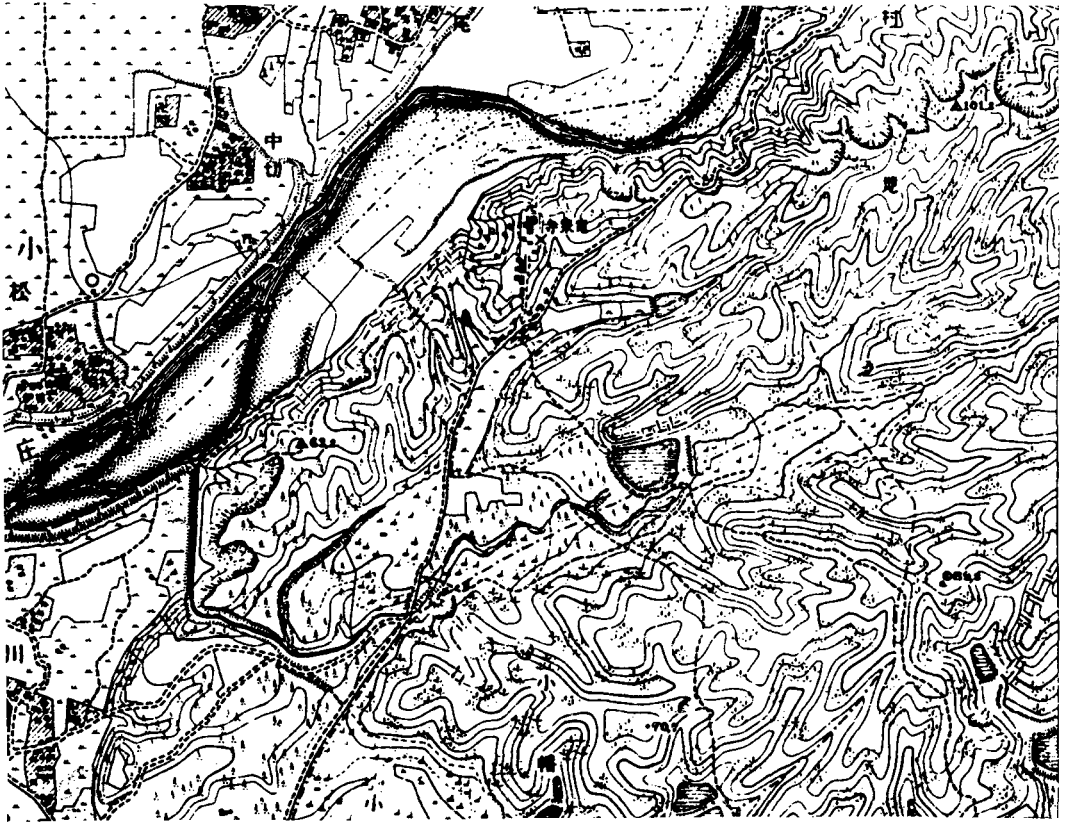


図3 崩壊地の見られる明治中期の地形図
(2万分の1地形図「勝川村」, 明治24年)

そのためかこれらの村々には、平野部農村では余り見られない玉込鉄砲を持つ獵師が1～2名ほどいた。

以上の状況は、この地域の山林が新田開発や薪炭林・建築材の伐採によって荒廃し、そのため砂留林を必要とするような土壌流出地帯へと変貌しつつあったことを物語っている。山が侵食された形跡は、明治中期の地形図でも見ることが出来る。(図3)。

このような多くの砂入地は庄内川筋ばかりでなく、矢田川、天白川筋でも同様にみられる。その砂入の状況については、次のように他の村絵図でも数多く見受けられる。図4によって、高針川と米ノ木川の合流点に位置する植田村の状況を考察する。植田村は村高913石、田58町余、畑6町余の村で、川の合流部に当たっていたため水害が多く、ことに明和4(1767)年の洪

水時の後、集落は駿河街道沿いから山麓部に移転をした。同村の絵図から河川に沿って多くの砂入地が描かれており、それらは蔵入地・給知(給地)の別なく広がっている。絵図から推測して、同村の全村耕地の3分の1以上が砂入地ではなかったかと思われる。

図5は庄内川右岸に位置する味鉢村の絵図である。味鉢村の『徇行記』の項では、勝川(庄内川)堤決壊砂入の地高212石、この田面積約12町にのぼるとある。本村の田の面積は162町なので、砂入地の面積は全体の7%近くに当たる。同村の絵図によれば、新木津川と庄内川の合流点付近や新川開削以前の大蒲沼の氾濫地点などに砂入地が認められる。

香流川(矢田川の支流)筋にある猪子石村は砂留林16町余を有することからも分かるように、絵図でも多くの砂入り田畑を認めることが出来



図4 天保12(1841)年尾張国愛知郡植田村絵図

る。また矢田川筋にある猪子石原村や、高針村も同様である。

(2) 島畑の卓越する西部低地地域

名古屋城下町の西方に展開する愛知郡・海東郡東部の低地地帯に目を移そう。図6は新川に沿う榎津村を示したものである。

この地域に特徴的に認められる景観としては、島畑があげられる。同村の他にこのような典型例として、荒子村・米野村・下中村・八田村・打出村などをあげることができる。また名古屋城下町北西に位置する名塚村・稻生村・児玉村などでは、図中に「繰上畑」の文字が散見される。おそらくこれも島畑景観をなしていたものと解される。絵図表現上、島畑地域をまとめてブロック状に表した絵図もあろうから、実際に

はもっと多くの島畑景観が展開していたであろう。中上流地帯及び東部丘陵地帯で見られた砂入地は、ここではほとんど見られない。

また絵図に見られるこの地域のもう一つの特色として、旧河道の開田による新田が認められる。このように低地地帯における農地開発の中心は、旧河道の新田開発であった。それだけ低地地帯では河川が蛇行し、かつ多くの分流をなして流れていたため、それらを整理し河道を直線的に付け替えその河跡を田畑として開発していった。しかし蛇行していた河川を直線化し河道を狭くしたことによって、水害を甚大化させたようである。それは宝暦9(1759)年に藩内を巡検して『巡河日課』を著した碩学松平秀雲(君山)の指摘にも見られる⁹⁾。

したがってこのような低地では、水問題に関

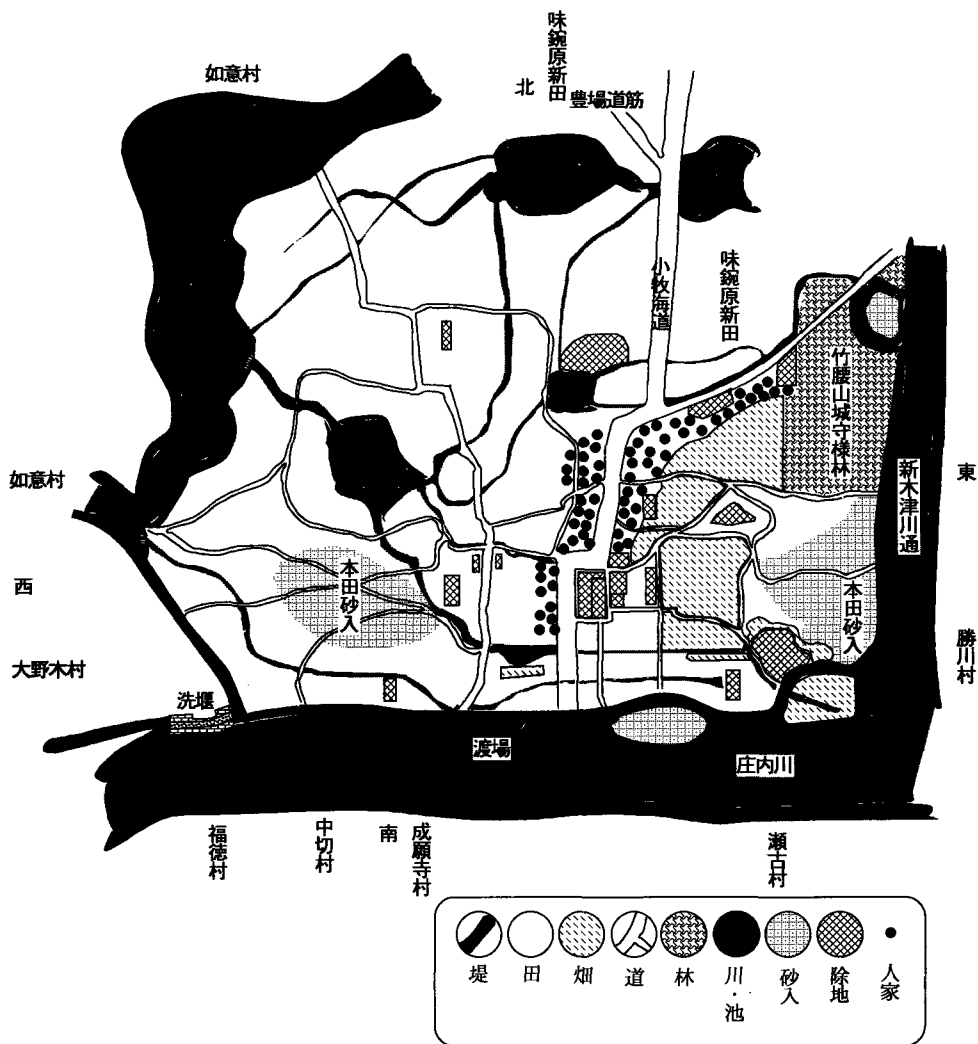


図5 天保12(1841)年尾張国春日井郡味鏡村絵図

しては悪水問題の方が深刻であったといえよう。庄内川や新川などの諸河川の集まる海東郡東部には、このような不安定な生産条件を反映して多くの割替村落が認められた。尾張の割替慣行の起源については色々と論議されているが、江戸期の地方役人の見解によれば、いわゆる損益均等配分にあるという¹⁰⁾。

この地帯では「水腐地」が多く、洪水やそれによる湛水・冠水によって作物被害が多く発生したため、農民間で取り決めて耕作地を割替えていったと考えられる。割替は、一般的には高所有者（土地保有者）の間で行われている。所

持高が均分していることと割替とは関係を持つという説もあるが、元来この低地地域は無高率が高く、村として持ち高が均分という状態ではないので、割替と村での持ち高の均分とは直接結びつかないのではないかと考えられる。

この地域の無高率の高さは、開発の古さと関係している。つまり初期の段階において、耕地も人口も過飽和に達しており、寛文期から寛政期にかけての約120年間の戸数の増加もほとんどが200%以下である。耕地の増加や戸数の増加がみられるのは干拓新田地帯のみであって、無高率の高い古田地帯ではそれは低い。したがって

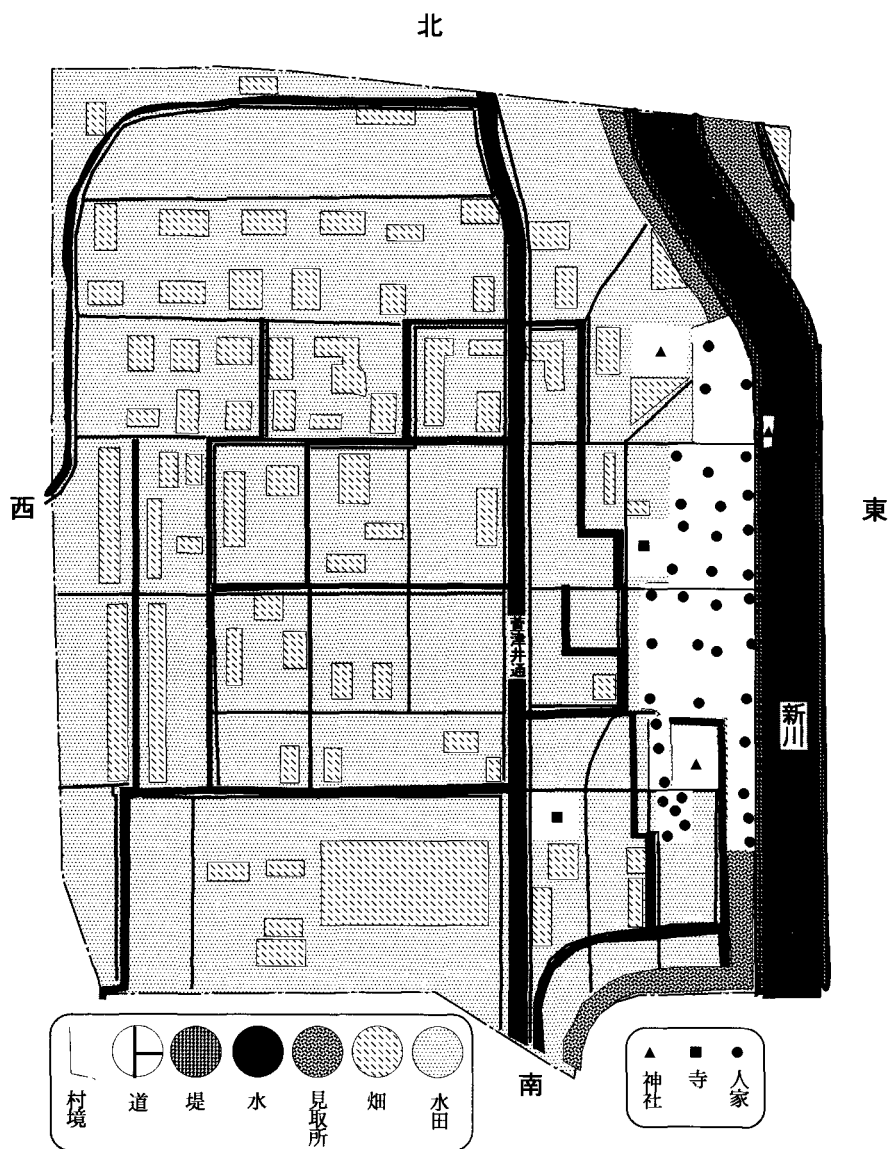


図6 天保12(1841)年尾張国海東郡榎津村絵図

耕地面積が頭打ちの状況の中で戸口の増加が起これば、それらは耕地を所有できない層、すなわち無高層となっていくのである。また、そのような無高層が臨海部の干拓新田地帯の労働力となっていくことが考えられる。これらの無高層が小作人となったり、日雇い稼業に出たりあるいは簗生産などの余業に精を出して生活を支えていたことも記録から分かる。

(3) 都市化する城下町隣接地域

図7に示したように名古屋城下とは、普通、坂上町、樽屋町、橘町にあった大木戸の内部(木戸内)を指すものと解されている。また名古屋と称されるのは、行政上、武家屋敷町・町人町(町中)・寺社門前・町続きより成る地区と言われる。したがって名古屋は、城下よりも広い地域を指している。このうち町続きというのは町中・寺社門前に隣接する新市街で、享保13(1728)

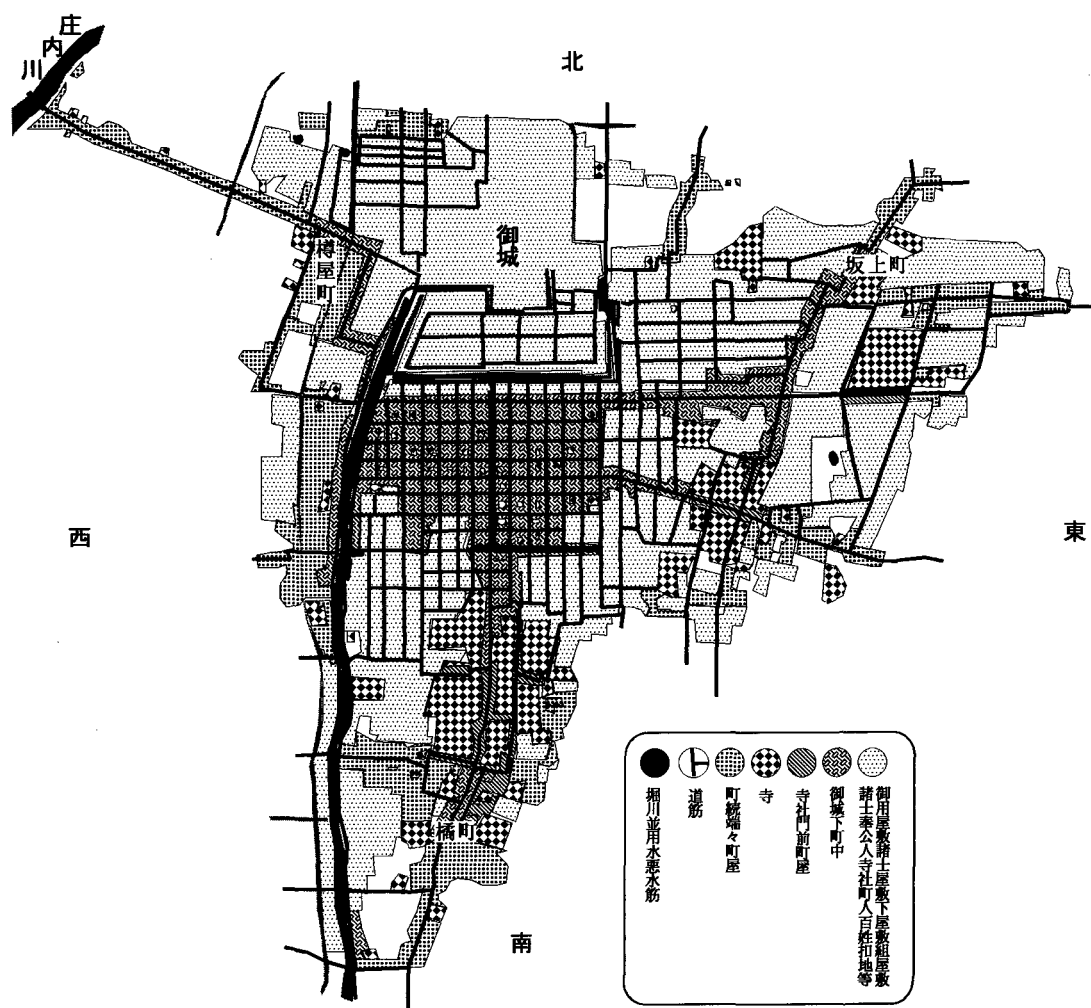


図7 名古屋城下絵図(作成年不詳)

年以前は、農村支配を執り行う国奉行（後の勘定奉行）の管轄下にあった。名古屋が膨張するにつれて、ここにも町屋が出来、放火犯や盗賊が潜伏するのに都合の良い場所となったため、享保13年以降は、犯人逮捕を容易にするべく、戸籍に関する事項だけは町奉行に移管させることとなった地区が町続き地である¹¹⁾。したがって町続き地とは、まさに都市化しつつある地域であったといえよう。

さてこれらの町続き地における都市化の様子を見るとしよう。大曾根村は勝川街道(下街道)や瀬戸街道への出口に当たり、村内には商家や茶店が多く、交易繁盛の地となっていた。かつ

ては大曾根村の農家のあった場所を元屋敷と言い、同村の絵図にもそれが見られる。ここには農家があったが、いつの頃か街道沿いへ移動した。ところが農家はかえって衰微してきたので、文化7(1810)年願いによって再び農家は元の地すなわち元屋敷の地へ再移転したと言うのである。

図8に示した日置村も同様な状況にある。日置村も城下の繁盛にしたがって戸口が増加し、堀川と江川間も家臣の下屋敷が立ち並び、旅籠町周辺にあった百姓屋敷のうち、13戸を江川西の部分に移転させた。『名古屋府城志』¹²⁾によればその理由として「宅地が狭くなり秋作収穫の

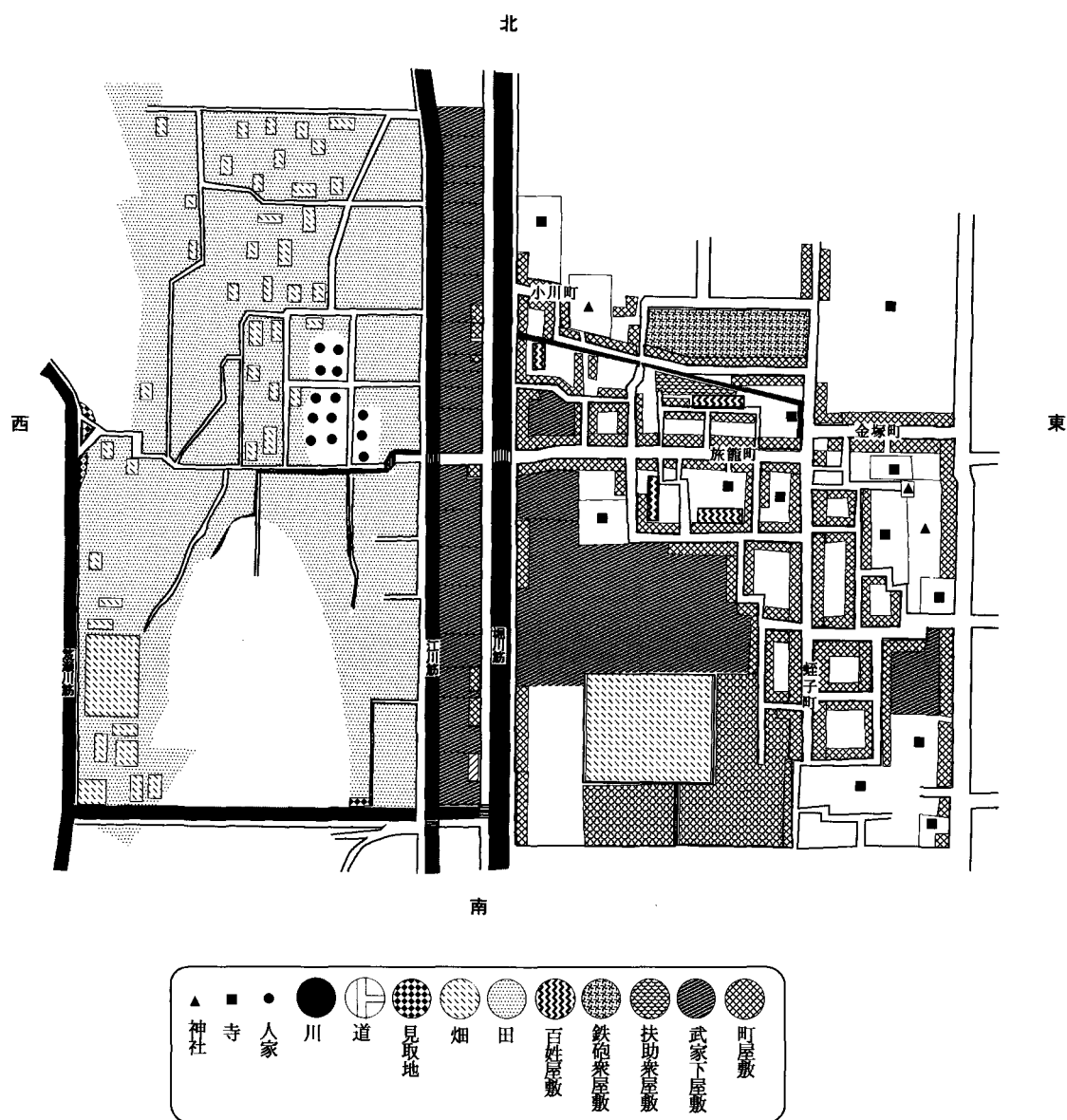


図8 天保12(1841)年尾張国愛知郡日置村絵図

頃粃の干し場もなくなるようになった」ことをあげている。金塚町が町屋となったのは享保12(1727)年、恵比須(蛭子)町は宝暦5(1755)年、小川町は明和2(1765)年にそれぞれ町屋へ組み込まれていった¹³⁾。

このような集落移転の例は、美濃街道筋の押切村でも見ることができる。押切村の場合には田園地帯の中にあった農家が、街道筋に移転したという例である。枇杷島村の場合は、街道筋

は元は松原であったが、やがて街道筋に農家が移転し商家も混じり商売繁盛地になったという。商家は繁盛する反面、農業は衰退し農業人口は減ったため、文化6(1809)年願いによって、これも先の大曾根村の例のように20戸の農家が再移転した。絵図の記載が正確だとすれば、街道の北側に隣接する地区の20戸がそれに相当するのではないかと推測される。いずれも農家の再移転が文化6～7年にかけて実施された理由は

よく分からないが、この村は戸数336戸のうち53%に当たる180戸ほどが借家であったという。

前津小林村も戸数増加は著しかったが、農家（糧戸）は段々と衰微して借家は増加していったという。また城下の南東に位置した前津小林村は城下随一の景勝地と言われ、武士や商人の別荘が連なり耕地も商人の所有となっていた。前津小林村での町屋化は、正徳2（1712）年から享保、宝暦といった具合に、18世紀前半から後半にかけての時期が中心であった。

IV. 自然環境と土地利用の側面から見た 地域的特色

（1）砂入地の発生に関わる尾張東部丘陵地帯 の山林植生と山林利用

前章で指摘した尾張東部丘陵地帯から平野部への移行地帯においては、多くの砂入地の発生が認められた。砂入地は当然洪水の結果であるから、治水上の問題がそこに存在したと考えられる。その要因を求めるとそれは、新田開発と燃料としての薪の採取に伴う急速な森林の開発（乱開発）によるところの土壌流出が大きいと言えよう。庄内川をはじめ名古屋城下町周辺の諸河川がかなり天井川化していたことが、洪水を一層発生しやすくさせたのである。このような対策として、尾張藩の普請奉行を務め洗い堰や新川の開削に手腕を奮った治水家水野千之右衛門（号を岷山）の考えをまとめた『岷山先生治水伝』には、山林保護対策として雑木を植えることを説いている¹⁴⁾。そして明和4（1767）年の洪水は、この地域の山林が松ばかりで雑木が無かったことがその原因であるとも述べている。この明和4年の洪水は、庄内川流域のみならず尾張の広範囲にわたって被害を与えたようである。そもそも尾張東部丘陵地帯は花崗岩地帯であり、土壌の風化が起りやすい土地でもあった。

18世紀中期は、尾張では水害が頻発した時代でもあった。先に指摘した明和4（1767）年の洪水もそうであるが、その前後の明和2年や安永8（1779）年の洪水は、庄内川流域に多大の被害

を及ぼしており、藩でもついにその本格的な対策に乗り出さざるをえなくなっていた。特に庄内川右岸は水害の影響を強く受ける地域であった。

藩は天明4（1784）年から天明7年にかけて、新川を開削した。これは庄内川沿いの味鋤村と大野木村の間に長さ約40間（約73m）の洗堰をつくって庄内川の余水が大蒲沼の方へ分流し（図5参照）、大山川及び古木津用水、さらに下流で五条川を合流させて、伊勢湾まで約20kmに及ぶ川を掘ったのである。また18世紀中期には有名な木曾川筋の宝暦治水（1754～55）も行われ、天井川化した諸河川の治水も実施された。庄内川の決壊は名古屋城下に直接の被害を与える恐れがあっただけに、藩は庄内川の増水には常に注意を払っていた。庄内川が増水すると藩は、水まわり奉行を派遣してこれを監視し、堤防決壊の危険性が高まると、名古屋城下の対岸にある小田井側の庄内川右岸堤防をその地域の農民に命じて切らせた。このような洪水時における城下町優先主義は尾張藩にのみ限られるものではないが、ここに当時の洪水対策の封建主義的な性格を見ることができる。

平針村絵図をはじめとして、当地域の絵図には多くの溜池が記載されている。この溜池の築造によってまた多くの新田が切り開かれていったのである。特に今日の守山区に位置する地帯は寛文期以降、溜池が数多く築造されている。これらの村々は地形上、庄内川の水利を利用できないために、「谷川懸かり」「志水懸かり」「出水懸かり」に依存する地域で早損所であった¹⁵⁾。こうした状態であった当地域の新田開発は、このような溜池の建設によって成し遂げられたものであろう。それだけ名古屋東部の森林地帯は、近世前期には開発の余地をかなり残していたわけである。名古屋新田はその代表である。その結果として、この東部丘陵地帯の諸農村では農家戸数の増加が起こった。概ね寛文期から寛政期にかけての約百年間に、戸数は2～3倍に増加している。

(2) 低湿地地域における土地利用形態

名古屋城下町西部の愛知郡から海東郡にわたる低湿地地帯は、数字的に見ると水田率はその土地条件から推測されるほどには高くない。総じて言えば、70%前後といえよう。水田率に関して言えば、東部丘陵地帯の農村の方がむしろ高いように思われる。低湿地＝水田耕作と単純に結びつけることはできない。それはすでに榎津村絵図でも見たように、この地帯では島畑を造成して低湿地に対応してきたと考えられるのである。もちろん島畑自体の造成は江戸期以前にさかのぼると考えられるが、これら島畑は水田とともにこの地域の重要な農地として機能していたと考えられる。

この地域の特産品としては、瓜類や茄子などの野菜類の生産をあげることがでる。当地域では、水田裏作としての藺草の栽培、そしてそれをもととした畳表や筵などの藁加工がみられた。そしてそれらの品は、名古屋城下の称宜町や尾頭橋などの問屋に持って行かれた。この他、瓜や野菜類の多くは下小田井市へ出荷された¹⁶⁾。下小田井市は藩内最大の青物市で『徇行記』には慶長13(1608)年庄内川に架かる枇杷島橋を造営した後、橋のたもとに6軒ほどの問屋を設け、近在より毎日野菜や米穀類を農民が持ち寄り、日市として繁盛したという。問屋はやがて38軒に増加し、その他の商家も数百戸が堤防上に軒を連ねていたという。『尾張名所図会』¹⁷⁾が青物市の賑わいを伝えている。当地域におけるこのような野菜類をはじめとする商品作物生産は、地域内に散在する島畑の存在を前提としたものであった可能性が高い。

このように低地においては、瓜や野菜は商品作物として重要であったし、その意味では低地での畑地の造成も積極的に行われたであろう。また幕末には、畔田の造成が藩からも奨励されるなどといった点は、生産条件向上の一手段として評価できるものである。畔田の様子について知られるのは、南部の茶屋後新田のみである。

V. おわりに

本発表では絵図をつなぎ合わせて分析することによって、当時の地誌的状况を描き出すことを試みた。村絵図を中心としながら名古屋城下周辺地域の地誌的状况を見ると、メソスケール地域といえどもさまざまな地域的特色を持つ地域が存在することが知られる。新田開発や薪炭採取により山林荒廃が進行し、その結果河川への土砂流出が起り、絵図に多くみられる砂入地の存在が特徴的な東部丘陵地農村、尾張の穀倉地帯の中核をなし、島畑という高度な土地利用形態を生み出しつつ、農地の開発は限界に達し、人口の増加と相まって無石層が多く発生している低地帯の農村、そして城下町に隣接しているために、都市化の影響を受け農家移転がみられた町続き地の農村などの存在が明らかとなった。

今回のシンポジウムでの討議の中で、メソスケールで地域をとらえる場合、そこではどのようなことが論議されるのかという点の指摘があった。本論に即して言う、砂入地の分布をミクロスケールでとらえるならば、河川沿いや特に河川の合流点に多くの砂入地が認められることから、河川沿いの耕地の不安定さや、その砂入被害の面積的広がりなどを知ることができる。さらにそれらをつなぎ合わせてメソスケールで見るとき、砂入地を持つ村々が尾張東部丘陵地を中心に広範に分布していることから、当地域の山林荒廃の様相が明らかになってくる。

村絵図を地誌的資料として用いるという本稿の試みは、容易には一般化されないことは否めない。おそらくこのような試みが可能なのは、一定時期に全藩的に地誌的調査が実施された特定の地域に限られるであろう。但し時期を限定しなければ、かなりの量の村絵図の残存が期待される。今後は、少なくとも県単位での村絵図データベースの作製などがすすめられてもよいのではなかろうか。

もとより村絵図は多様性を持っている。それ故今日の地形図などに比すれば、縮尺の問題・

位置関係の不正確さ・書式の不統一性など多くの難点が存在する。しかしそこに描かれた景観は、なぜか、地形図以上に「生々しさ」を感じさせる。手書きであるということがそう感じさせるのか、また当時の人々が自然環境を生かしながら、かつそれに対応しながら生きている状況が鮮明に描かれているせいだろうか。過去の地域の地誌を描くに際して、このような村絵図の利用法が確立されていくことが望まれる。

(愛知教育大学教育学部)

〔注〕

- 1) 木村 礎(1983):『村の語る日本の歴史 近世編①』そしえて文庫, 50~51頁。
- 2) 木村東一郎(1987):『近世地図史研究』古今書院, 230頁。
- 3) 徳川黎明会(1988):『尾張国町村絵図——名古屋市域編——』国書刊行会。
- 4) そのほとんどは愛知郡の新田村である。
- 5) 新編一宮市史編纂委員会編(1968):『新編 一宮市史 資料編 8』184頁。

「其村々一村字分、併御蔵入給地入会之村方ハ御蔵入之地所・給人拝領地共、境々之見分り安キ様、図面取調、一円給地之分ハ給人々々之地所相分候様夫々絵図面取調可差出旨、御側御用人衆被申聞候由、御勘定奉行衆被申聞候間、一村毎ニ御蔵入本田新田並給地地境、又ハ概地ニ而地境難書出分ハ其訳書頭、村境其外寺院社地・川々用悪水・其余共色分等ニ入念委敷相調、若寛政年村々ハ書出候図面ニ其後謂有之変化いたし候分ハ其訳書頭、右ハ上直紙四枚継又ハ六枚継程之格好ニ可差出候、若書面ニ而難相分村々ハ、早々調方陣屋ヘ可伺出候、此状承知之上無滞先村ヘ相廻留村方可返候。

(天保12年)

四月廿九日

(市瀬、鶴多須代官)

市 東七郎

別紙村々 庄屋 』

- 6) 前掲3)の解説による。また上志段味村絵図(天保15年調製)には「右ハ尾張志御用ニ付御吟味之分書上申御座候相違無御座候以上」とあり、村絵図の作製が明確に尾張志編纂のためであったこと

を示している。

シンポジウムにおいて、コメンテーターの佐賀大学の五十嵐氏から、これらの村絵図と『尾張志』との関係についての質疑をいただいたが、『尾張志』をみる限り、これらの村絵図情報が、同書の編纂において活用された節はほとんど察し得ない。当初計画では、村絵図からさまざまな情報を得る予定であったのかもしれないが、結果的には、せいぜい各地の溜池・山・川などの自然的名称や寺社名などを確認する程度として用いられたのではないかと推測される。『尾張志』自体が、村別の地誌ではなく、村名、山川、池、寺社、古城跡、人物などといった項目別の地誌の体裁をとっているため、個々の村絵図から地域性を捉えようとする意識はなかったと思われる。

- 7) 名古屋市教育委員会編(1966):『名古屋叢書 続編』第5巻(尾張徇行記2), 472~475頁。
- 8) 名古屋市教育委員会編(1964):『名古屋叢書 続編』第1巻(寛文村々覚書 上), 259~260頁。
- 9) 愛知県農地史編纂委員会(1957):『愛知県農地史(前篇)』愛知県農地開拓課, 171~174頁。
- 10) 前掲9), 179~182頁。
- 11) 林 董一(1989):『尾張藩漫筆』名古屋大学出版会, 135~149頁。
- 12) 名古屋市教育委員会編(1963):『名古屋叢書』第9巻(地理編4『名古屋府城志』), 105~120頁。
- 13) 深田正韶(1843):『尾張志(上)』歴史図書社(1969年復刻), 66~67頁。
- 14) 名古屋市教育委員会編(1962):『名古屋叢書』第11巻(産業経済編2『岷山先生治水伝』), 177~210頁。同書の中から関係箇所を抜粋すれば、以下のようである。

領内の河川の天井川化については「今、矢田川にては、猪子石村、大幸村の田に清水の湧出する所数カ所あり。是、田畑より川底高く砂河原となりし故也。(中略)今、川々によりては地よりは洲の高きこと壹丈にあまれる所あり」と述べている。

さらに山地植生に関しては「(前略)明和四亥の洪水に、愛知・春日井の山抜け、今以て顕然たり。是、愛知・春日井の山は浅くして岩なし。其上、松計り多くして雑木茂らず。岩なき浅き山に覆うべき雑木なき時は、夏は日当たりて山を乾か

し、冬は凍あがりて土を砕き、春雨に逢ふては土砂を一時に押出して川々を埋る事夥し。(中略)然ば、水源の山谷を常々養ひ、雑木を茂らすべき事に能々心を尽くすべし。(中略)然共、今雑木を山谷に茂らす事は安からず。如何となれば、山村の人民困窮して今日の貯へなければ、山の下柴を刈り或は落葉をかき集めて明日の食物に易ゆる。是雑木の若苗は下柴に交りて生るものなれば、下柴の小枝と共に刈る故、年を経るといへども雑木山となる事あたはず。(中略)山に樹木を植え又山の洲留めをなす事は、今年なしたる功の明年顯

はるべき事にあらずして、気の長き計なれば、主宰能々心を用ひずんば年々怠り勝になるものなり。(後略)」とある。

15) 前掲8)、上志段味村では雨池・谷川懸かり・旱損所、中志段味村では志水懸かり、下志段味村では出水懸かり・旱損所と記されている。

16) 岩崎公弥(1994)：近世後期尾張における農民的商品生産・流通と農間余業——『尾張徇行記』をもとに——，愛知教育大学研究報告，第43輯(社会科学)，57～74頁。

17) 小田切春江(1844)：『尾張名所図会』

THE USE OF VILLAGE MAP IN EDO PERIOD AS A MATERIAL FOR GEOGRAPHICAL DESCRIPTION ON MESOSCOPIC-SCALE REGION

Kimiya IWASAKI

The aim of this paper is to describe the geographical features in Owari region during the late Edo period using many village maps. When we describe regional geography on mesoscale region, we have some limitations to do it. One of those limitations is the shortage of material like historical map. When we try to draw the regional features by using old village map, we need some premises on old village map. Those premises are as follow, spatial continuity on existence, similarity on drawn time, similarity on drawn purpose, uniformity on map format about old village map.

There are many old village maps which fill such premises in Owari region. Much of those maps were drawn in 1840s. The reason why the time on preparation of around half maps is 1840s is that the feudal government ordered each village to prepare those map to compile the geographical description by the hand of the Owari feudal domain. Now we can simply use those copied village maps. The author studied the regional features of Owari region during late Edo period stressing the natural environment on the region. As the result of it, it was made clear that there were some sort of homogeneous regions in the central part of Owari region.

They are as follow.

(1) The region in the eastern hilly land where the occurrence of many plots covered with sandy deposit by flood was seen remarkably in the concerned map. This phenomenon originates from the waste of the forest vegetation in the Owari hilly land. During early and middle Edo period, a lot of new fields were developed in the hilly land by opening up the natural forest. As the result of the development mass outflow of forest soil were occurred. As the sandy soil outflowed from the forest land accumulated in the riverbed, most rivers became raised bed river.

(2) The region in the western low land where much distributed dry fields in paddy fields were seen. This region is the low and marshy land. There were also much flood in this area. People have made much distributed dry fields raised in paddy fields to cope with the flood and the marshy land. These dry fields are called "shima-hata". These raised dry fields were used for cultivation for various cash crops and farm products like vegetable.

(3) The region in the suburbs of Nagoya castle town where many farmsteads moved from the suburbs to the outskirts in the eighteenth century. This area was the urbanizing region in a sense. In these area many farmsteads were obliged to move into the outskirts of the castle town by the reason of the increase of new residents like warriors, marchants and craftsmen.

The author considers that Owari region in the eighteenth century encountered with the changeful time on the natural and social environment. We can see such features through many old village map and constitute the total geographical landscape by combining each village map.